

今回は、島根県教育委員会 野津 建二 教育長に、しまねの社会教育への思い、期待することを語っていただきました。

「学ぶこと」「教えること」の大切さ



島根県は、決して経済的に豊かというわけではありません。誰もが経済的豊かさを実感できているわけでもありません。しかし、島根の人たち一人ひとりを見てみると、そんなに暗く生きておられるわけではなく、一人ひとりがとても一生懸命生きておられるし、高齢となっても笑顔で暮らしておられる、そういう生活ができています。経済的に豊かではないけれども、人生が貧しい訳ではありません。それはなぜかということ、私は、経済的豊かさとは別のことで心が満たされることからだと考えています。

戦後の高度経済成長から、人の生き方は大きく変わってき

「活動を起こせ」に込めた思い

社会のシステムとしての社会教育とは、人の学びを促し、導くことで、成果として学んだ人が地域で心豊かに生きていくということです。数値化できるものではありませんが、なんとなく笑顔が多いな、なんとなく家から外へ出てるな、町へ出てるなとか…いろんな場面があるんでしょうね。その携わる人の接し方もいろいろあるんだろうなと思います。そういったものが地域の隅々に浸透していくためには、ある程度組織立ててやる必要があります。組織立ててやるのが一番効果的です。そして社会教育を支える人を、プロとして確保し取り組んでいっていただく必要があります。それが教育委員会や公民館等です。さらにはNPOの方々など、他に職業をもちながら、やっていただいています。これもとても大切なことです。

社会教育におけるいわゆる「導く側」の人たちは、取組を

しました。都市部への人口集中、経済的なもので生活を満たそうとする、そういう社会を迎えたのです。ただ島根では、私が日本の「伝統」と考える「人と出会う」「会話をする」「人と触れ合い、つながる」といったものが廃れずに残っていると考えています。心が豊かになる要因として、私はやはり「人と人とのふれあい・つながり」といったものが生み出す満足、心が満たされるということが、人としての豊かさを一番感じることになるんだろうと思います。島根には、そういう価値観をもっている人が多いのだと考えます。しかし、これは自分で学んだり、人から教わったりしないと、なかなかできることではありません。島根のような環境の中でも、人と人のかかわりがないままだと、行動に移すことはできません。人間のすばらしさとは「学ぶことができること」「教えることができること」です。このことを生かせば、島根でももっと豊かな人生を送られる人が増えると信じています。学びと教をきちっと生活の中に、地域の中に確立するということが、住民のための行政の大きな役割の一つだと考えます。行政が直接何かできるわけではありません。人がやるのですから。行政は、人が人の学びを促したり、あるいは教えたり、そういうシステムをきちんとつくっていく。そのことが、地域を守り、維持・発展させることにつながるのです。この社会全体のシステムを、私は「社会教育」と捉えています。

進めていくうちに、だんだん慣れてくると自分の活動、自分が動くことが目的になってしまうことがあります。どれだけ動いてきたか、どれだけやってきたかが目標になってしまいがちです。でも、本当はそうじゃなくて相手をどれだけ動かしたかということに、常に意識をもっていたいただきたいです。

住民の気持ちや行動の変容など、具体的に「何かを始める」「今までと違う動きをする」というところが成果であり、目的なのだと考えています。そのことを常に意識するために、県民の皆さんの日常生「活」に普段ない「動」きを起こせ＝「活動を起こせ」と言葉をたてました。「活動しろ」ではなく、「起こせ」なのです。これは、以前から使っている言葉なのですが、一つの行動指針として、今の若い方や新たに社会教育に携わる方に、その意味を再認識していただけたらと思っています。

これからのしまねの社会教育に期待すること「学びのサイクルのアシスト」

まずは「人々を家から外に出すこと」が大切です。それにどうアプローチするか、これは島根創生計画(令和2年3月)にも掲げていますが、個人の趣向を中心に集団化していくということです。例えば、「スサノオマジック」を観に行くだけでもいいんです。試合中に盛り上がり隣の人とハイタッチをする。それも1つ壁を越えたと言えます。同じような趣向を持っている集団のところへ行ってみる。そうやって世界を広げていくことで、他人の人生を自分も共有・体験することになります。つまり誰か1人とかかわることは、人生体験が2倍になるということです。公民館等で行う講座の有用性はここにあると考えています。参加してもらえよう人を導く、または、町に引き出すための入り口的な役割を担う、そのような社会教育的に大きな役割が公民館等にはあります。

子どもとのふれあいにも学びがあります。子どもの成長を見るという機会は、その子の成長を俯瞰して見ることになり、自分にとって倍速で勉強になるのです。私は、子ども達にレスリングの指導を20年続けています。子どもへのかかわり方は、同じ大人でも指導者と保護者で異なります。例えば試合後に、親と指導者が両方怒ったら、子どもは行き場がないですよ。子どもへのかかわり方からも学びがあり

ます。子どもって面白いですよ。無垢ですから。

人とかかわることで人生観が少し変わり、広がる。すると今まで受け手だった人も、困っている人や助けが必要な人に対して行動を起こそうとします。そして実際にやってみることで、相手に感謝されたり、相手の気持ちや行動に変容があったりすると、より相手の役に立ちたくなります。より良い方法を考えます。「その次はもっと…」とさらに考えます。そういう気持ちを満たそうと、努力することが向上心です。その向上心による学びが“自転”していけばいいのですが、そう簡単なことではありません。だからこそ、その学びを我々社会教育に携わる者が導いていく必要があるのです。「こういうことがあるよ」「こういう人がいるよ」とアシストすることで、どんどん成長していく。そのサイクル自体が、「心豊かになる」ということです。

人間いくつになっても、向上心が大人り小なりあります。それによって心が満たされる社会が確かにあるんですね。その心豊かな地域社会、心豊かな生活につながる地域社会の正体って、学びのサイクルができる関係にあることなのだろうと考えています。

社会教育にかかわってくださっている方々へ

住んでいる人が満足する地域として在り続けるためには、ほったらかしにしているはいけません。やはり、人が努力していく必要があります。私は、その支え続ける人の中心の一つに、社会教育にかかわってくださっているみなさんがいると思っています。

生活水準についての捉え方は、個人でいろいろだと思いますが、それを越えて「やっぱり毎日楽しいな」と感じていただきたいです。島根創生計画の「『笑顔あふれるしまね暮らし』宣言」にあるように、普通の暮らしをしていて、そこで笑って過ごせる。「人がどうなるのか」ということが目標なのです。

そして具体的に「人」にアプローチするのが、社会教育に携わっているみなさんです。地域住民の行動変容とか、満足する形は「笑顔」、最後の最後には人が笑ってるなあと、思えたら正解です。合格です。「笑えたらいいんだ、そういう生活が『笑顔あふれるしまね暮らし』なのです。日常の中の笑顔という意味で、この言葉を創りました。それを実現す

るためには、社会教育の力がとても大きいと考えています。ですから、しまねの社会教育に携わっていただいているみなさんには、そういう思いで、島根の将来をつくっているという気概をもって、これからも取り組んでいただきたいと思えます。よろしくお願いします。

